獄中記



エンジェル

浮世離れの世界は不条理の
巣窟であった。

　まさかこんな事で逮捕されるとは思いもよらなかった。

仕事の給料日にはまだ数日あり金欠の大橋祐一は、付き合ってまだ一ヶ月の彼女、高橋結花のアパートにいた。

結花は某デパートに勤めるOLで、出勤していてアパートには居なかった。

祐一は、独りアパートの部屋で暇を持て余していた、昨夜から彼女の部屋に泊まっている。

仕事は午後からだし金もない、部屋を物色していると箪笥の奥に預金通帳があった、何気に中を確認すると残高１５万円とある、祐一は後で返せばいいと印鑑も一緒にあったのでそのまま銀行へ下ろしに行ったのだ。

その晩、借りたことは言い出せず、臨時収入と嘘を付き彼女をデートに誘った。

いつもの安い居酒屋ではなく、高級焼肉店と噂されているその店で贅沢にも特上カルビなど、食った事のない代物ばかり注文したのだ。

「今日はシティーホテルに泊まろうよ・・・豪華に行こうぜ・・・」

「バイトのお給料未だだって言ってたじゃん・・・大丈夫？」

「うん・・平気・・・・」

　お互いスケジュールが合わず、合えないでいた矢先、結花からの電話がなった、部屋に泥棒が入って警察を呼んだという。

「ねえ、聞いて・・・家に泥棒が入ったの・・・銀行通帳と印鑑が取られて・・・預金も下ろされちゃった・・・」

祐一はドキッとし動揺を隠せない。

「えっ・・・嘘？・・・いつ？」

「預金が下ろされたのって、ほら、この前焼肉食べに行った日だって・・・」

「じゃあ、その日？」

「うん・・・そうらしいわ・・・」

祐一は事実を明かそうとしたが、まさか警察沙汰になっていようとは思いもよらなかった。

このままでは何れバレてしまう、何とかしなければならない。

大橋祐一２４歳、地方の高校を中退し様々な職を転々としてきた、実家にも７年近く帰っていない、辿り着いた場所は衣食住完備のパチンコ店だった。

実家にいた頃、運転免許を持たない祐一は親父の車を失敬し、無免許運転で警察に３回ほど検挙されていた、最後の検挙で常習と判断され起訴になり、拘置所に収監されてしまった。

その後の裁判で刑の執行を猶予され、釈放された経緯がある。

流れ着いたパチンコ店で、客として来ていた結花をナンパしたのが始まりだった。

１０日程経っただろうか、パチンコ店が寮として借り上げているアパートに、早朝チャイムが鳴り響いた、時計を見ると６時を回っていた。

玄関を開けると、６人位のスーツを着込んだ男達が一斉に祐一を睨んだ、すると一人の男が胸のポケットから警察手帳を祐一の目の前に差し出した。

「警視庁三田警察署です・・・大橋祐一君だね？これ見て、家宅捜索令状・・・裁判所が許可したものだから・・・上がらせて貰うよ」

そう言いながら６人の警察官はゾロゾロと狭い６畳一室の部屋に雪崩れ込んだ。

「何だよ・・どういうことだよ・・・」

「お前、高橋結花さん知ってるよな？」

「はい・・・」

「その人のアパートから何か取らなかったか？もう全てわかってることだから、正直に言え」

「ちょっと待ってよ、結花は彼女だよ・・・直に返そうと思って・・・給料貰ったら返すよ・・・」

「そういう問題じゃない・・・被害届けが出ている以上、窃盗事件なんだ・・・」

「待ってよ・・結花に電話するから・・・」

「ダメだ・・・」

捜査員は部屋中を物色しながら何か物を探している、すると一人の捜査員が結花の銀行通帳と印鑑を見つけ出した。

「おい、これだな大橋・・・６時４０分窃盗及び有印私文書偽造同行使詐欺の容疑で通常逮捕」

捜査員が祐一の両手首に紐付きの手錠を掛けた。

「チョッと待ってくれよ・・・ふざけんなよ・・・電話掛けさせろよ・・・」

「いいか、無駄だ・・・彼女はお前の犯行だと知り、許せないと言ってるんだ、観念しろ」

警視庁三田警察署の二階奥に刑事課がある、雑然とした室内には数人の警官が執務中である、その更に奥が取調室でまるで刑事ドラマで見るような質素な部屋に机が一つと、椅子が対面に並んでいる。

祐一は手錠を外され奥の椅子に座るよう命じられた、それから尋問が始まった。

本籍、住所、氏名、年齢、から始まり生い立ちや学歴などありとあらゆる事を詳細に聞かれた。

「大橋、お前今迄警察に何度御世話になってる？」

「はあ・・無免許で３回位・・・」

「うん・・最後は起訴されてるな・・・懲役１０月執行猶予３年か・・・・」

「大橋・・・今度は懲役行くかもな・・・・」

　暫くすると鑑識課へ連れて行かれ、写真と指紋を指一本づつ採られた。

取調室に戻ると、昼飯の用意がしてありそれは、カツ丼ではなく安そうな幕の内弁当である。

祐一は弁当が喉に通らなく食べ残してしまう、お茶を出され一気に煽ると刑事に煙草を勧められる、今日起きてから初めて吸う煙草は、感慨深かった。

　今日の取調べは終わり留置される事になった、留置管理課で素っ裸にされ、持ち物全てを記録される、財布の中身もカード類や現金全てを事細かにシートに羅列し確認の拇印を押す。
そこで初めて留置番号なるものを与えられ、ここでは名前ではなく番号で呼ばれる、祐一は２４番であった。
留置場はこれで二度目である、鉄格子に金網が張られている房が連なり円形に配置されている。
それは狭くおよそ３畳ほどのスペースに二人で収監される、トイレにドアは無く丸見えの状態である
、祐一は房舎番号２番に入れられ、相方は恐ろしい顔をしているヤクザの人だった。
「大橋です・・宜しくお願いします・・・」
「おお、何やった？」
この狭い空間はどの房の奴がどんな罪で留置されたか興味津々である。
「はあ・・付き合ってる女の貯金を勝手に下ろしたら、こうなっちゃって・・・」
「窃盗か？」
「はあ・・・・」
「俺は小林・・・シャブだ・・・」

　夕方５時ごろ夕食が運ばれる、ここでは自弁といって自分の金を払って店屋物が頼める、相方のヤクザさんはカレーうどんを頼んだらしく、カン弁(留置場に運ばれる質素な弁当)と一緒に召し上がっている。
やがて６時には洗面の時間となり歯を磨いて顔を洗い、布団室から割り当てられた布団を房に運び敷き詰める、相方との距離は無く気色悪いが横を向けばマジかにヤクザさんの顔がある。
消灯は９時だが、その前に留置管理課長が点呼にやって来るため、正座をして待つのだ。
「１房８番」
「はい・・・」
という具合に朝晩決まって舎房全員の点呼を取るのだ。
　翌朝６時起床、布団をたたみ房内の清掃が始まる、ほうきで畳を掃き雑巾で便所を拭くのだが

、その雑巾を濯ぐのは便器の中で行う、これに慣れるまで時間が必要だった。

そのあと順番で洗面をし朝食となる、朝は殆どパン食でコッペパンか食パンにマーガリン、飲み物は何の茶葉かは解らないが一応お茶が配られる。

　８時、運動と呼ばれる時間がやってくる、所謂煙草が吸えるのだ、勿論自分の金で。

運動場には悪逆非道な殺人犯から痴漢、強盗と様々な犯罪に手を染めた猛者が並ぶ。

一人煙草二本を配られ、一本を愛しそうに時間を掛けて吸う、これが眩暈を起こしそうな位クラクラするのだ。

この運動が終わってから取調べが始まる。

　９時１０分過ぎ、祐一の取調べが始まる、昨日の捜査員とは打って変わり優しい口調であった。

「眠れたか？」

「はい・・・・」

「まあ一服しろよ・・」

留置管理課に預けている自分の煙草だ、ライターを借り自分で火を点けた。

「今日は事実の確認と現場検証するから、後でドライブしに行くぞ」

現場検証は犯行現場に出向き、事細かに犯行手順の確認や写真を撮ったりする。

縄付きの手錠を掛けられ捜査車両に乗り込み、結花のアパートに向かった。

結花の部屋に入ると、銀行通帳が何処に入っていたか指を刺すよう命じられた、祐一は箪笥を指差すとその瞬間写真を摂られた。

　次に銀行へ向かった、行内には大勢の人がいる中、手錠を布で隠され、どの用紙に書いて何処のカウンターで処理したかを説明した、物珍しさで人だかりができる、羞恥心で顔が火照る。

概ね事件概要の検証が終わり，送検(起訴か不起訴か検事の調べによって決まる)される事になる、祐一は交通事犯の犯歴があるため拘留延長(２０日間)になった。

これから長い拘留生活が始まる、起訴となれば裁判を受けることとなり、拘置所に移管され判決が出るまで自由を奪われる、ただ保釈請求で許可が下りれば裁判までは自由の身になれる。

祐一のような金も無い輩には保釈金など払えるわけがなく到底無理な話である。

　検察庁検事の取調べは坦々と行われ事務的に終わる、警察の留置場に帰ってからの時間の流れはいらいらする位ゆっくりと流れる。

事件の取調べが終わった被疑者は概ね留置場の房の中で、監物の雑誌や新聞を読むか昼寝をして時間を潰す、偶に面倒見と呼ばれているが、担当の刑事が取調室に呼んでくれて煙草を吸わせてくれたりお茶を飲ませてくれるのだ、この面倒見はヤクザさん優遇であった。

祐一のような小者は阻害される、お陰で煙草は朝の２本だけで禁煙成功しそうである。

　やはり起訴と決まった、留置管理課の職員が起訴状を持ってきた。

国選弁護人の選任が決まって、見知らぬ偉そうな弁護士が接見に来た。

その弁護士によれば間違いなく懲役になるとの事、他人事だと言わんばかりの態度であった。

やがて移管の日程が決まり東京拘置所へ送致される、その前に週２回の風呂の日だ。

一人１０分の時間が与えられる、これだけは急がないとあっという間に時間が無くなり、湯船に浸かる事さえ至極困難になる。

　いよいよ移管の日、荷物検査を行い護送車で東京拘置所へ向かう。
東京小菅にあるそれは、刑事被告人、懲役受刑者、死刑囚を合わせると３０００人を超える。
護送車から数珠繋ぎの被告人たちがゾロゾロと降りた先は、通称ビックリ箱と呼ばれる木でできたロッカーのような場所に一人づつ入れられ名前を呼ばれるまでそこで数十分待つ事になる。
祐一の名前が連呼され急いで出て行った、そこは刑務官が立ち並び凄い形相で睨まれている。
まず人定質問、次は所持品検査、その次が終生忘れ得ない屈辱の瞬間である、素っ裸にされ医療刑務官が身体検査を行うのだが、陰茎から始まり肛門の穴にガラス棒を突っ込まれるのだ。
異物を隠していないか、確認しているらしいが最早人権など無い。
それが２時間ほどで終了し、雑居房と呼ばれる未決拘留者の舎房へ入れられることになる。
ここでも番号を与えられ名前など必要なくなる、舎房は１０人部屋で一人一畳のスペースがある。
「大橋です・・宜しくお願いします」
他のメンバーに一応挨拶をした、すると早速リーダー風を吹かした奴が近寄ってきた。
「おう、若いの・・何仕出かした？」
お決まりの文句だが、言わなければ村八分となり厄介な事になる。
「女の貯金使っちゃって・・・」
「泥棒かい？起訴状見せてみな・・・ほう・・・窃盗、有印文書私文書偽造、同行使、詐欺・・・立派もんだなあ・・・」
　舎房内は一人３０センチ四方の物置台があるだけでそこに着替えを少々入れられる、それにトイレ、洗面と食器洗い用を兼ねた水道がある。
裁判までの間、日く付きの輩と過ごさねばならない、リーダー風の奴はやはり暴力団でシャブ絡みらしい、他には強姦、強盗と兵が集っている。
舎房の中央には個人用の座卓を並べて長テーブルのように配置されている、そこで昼間は食事を取ったり、手紙を書いたり、読書をして時間を潰す、警察の代用監獄つまり留置場と唯一違うのは二つある、一つは舎房内では就寝以外横になってはいけないのだ、もし寝そべっている所を刑務官に見付かった場合は注意を受ける、聞かない場合は懲罰対象になる、二つ目は煙草を吸うことができない、運動の時間はあるがウロウロと散歩するだけの時間である。
　食事は至極質素である、もっそう飯と呼ばれる麦入りの飯は慣れるまで大変だった。

驚いたのは、菓子類やパン、衣類書籍など様々な物品を購入できるのだ、個人の金で買った者を同じ舎房の者同士で分け合って食す、金が無く何も購入できない輩はここでは居場所が無い、無論発言権も無く、食器洗いや便所掃除専門となってしまう。

祐一は多少の金を持ち合わせていたため、危うく難を逃れた。

リーダー格のヤクザさんは饒舌で、場の雰囲気を盛り上げることに長けている。
特に女と隔離生活を送っている輩は下ネタで大いに話が弾む、ヤクザやさんは自分の陰茎に前回の懲役で歯ブラシの柄を加工した球を埋め込んだ事を平然と公開し、その埋め込んだ物で女を悦ばせた事を自慢気に話すヤクザやさんは、犯罪を犯したことなど微塵も感じさせない。
この場にいる奴等も同様である、これから裁判を受けるものにとって執行猶予か懲役の分岐は人生を大きく左右する問題である。

祐一の裁判が明日となった、かれこれ２週間拘置所にいるとこの舎房の古株になってくる。
アカ落ち(懲役刑)となれば何れかの刑務所へ移送され、辛い獄中生活が待っている。
午前１０時、東京地方裁判所小法廷、手錠を外され被告人席に座わる、右に国選弁護人がいて、左に検察官が無表情で座っている、すると正面のドアが開き法曹衣を着込んだ裁判官が入廷し来た、人定質問から始まり検察官の起訴状朗読、弁護人質問等が終わり次回１０日後判決。
拘置所の舎房に戻ると風呂の時間になっていた、ここの風呂はボイラーを使用して湯を沸かすシステムで、いっぺんに２０人は入れる広さである、やはり１０分しか時間が無いため急いで身体と頭髪を洗い湯船に浸かる、面白いのは一言も喋ることはできないのである、そして湯船に浸かるときは両手を湯船から出しておかなければならない、何故かというと湯船の中で身体を掻くと垢が浮くためらしい、２０人が無言でやるこの光景はまさに滑稽である、その光景を刑務官は無表情で見つめている。
本日の夕飯は質素である、もっそう飯と白菜を刻んだ薄い味噌汁、赤魚の煮付けだけ。
自費で購入したふりかけと鮭の缶詰でかき込む、お茶の葉は柳の葉っぱだともっぱらの噂だ。
就寝後、虫歯が酷く痛み始めた、祐一は報知器(刑務官に用を知らせるための器具)を下ろし刑務官を呼んだ。
「スイマセン・・・歯が痛くて鎮痛剤を頂けませんか？」
「よし、チョッと待て」
そのとき非常ベルが響き渡った、特警隊と呼ばれる１０数人の猛者が廊下を激走する、聞いたところによると受刑者や未決舎房の連中が喧嘩をしたり、暴れたり、刑務官に暴行したりした場合非常ベルが鳴らされる、その原因人物を特警隊が確保し取調室に連行する、やがて懲罰が決定

し懲罰房へ入れられる、その際拘束衣を着せられ自由を奪われたまま打ち込まれる。

刑務官に暴行しようものならとんでもない事になるらしい。

祐一の判決の日が訪れた、裁判官は懲役１０月とさらりと言いその瞬間アカ落ちが決まった。
舎房に戻るとアカ落ち部屋に移された、既に受刑者となった祐一は灰色の受刑服を着せられ、
分類作業(全国何処の刑務所に移送するかを図る作業)が終わるまで独居房で刑務作業を行う
事になる、その作業は紙貼りと呼ばれ紙袋を作る工程の分業である、一日８時間その単調作業
が続く。
一週間後移送先が決まった、２４歳の祐一は川越少年刑務所で受刑生活を送る事になる、２５
歳までは少年刑務所らしい。
護送車で川越少年刑務所の厳重な門を潜る、心臓の鼓動が激しく高鳴る。
祐一は教育課長の部屋に連れて行かれ、人定質問を受けた。
「これより君は新人教育を受けてもらう、生活基本動作を学び一週間後、作業場が決まりそこで
刑務作業に従事してもらう事になる」
留置管理課に移動しまたもや素っ裸にされ、身体中検査を受ける、そう尻の穴にガラス棒を突
っ込まれたのだ。
この川越少年刑務所は、若年層が殆どのため運動に力を入れている、その運動がキツイ。
腕立て伏せや腹筋など基礎体力作りと言いながら、毎日毎日筋肉痛で動けない、それに団体行
進の練習である、所内ではすべて歩き方が決まっている、逆らえば懲罰房行き。
祐一は第一希望作業を図書にしたが、第二希望の炊場と決まった。
炊場とは、受刑者と刑務官の食事を作る工場であり朝が早い、特別待遇もあり他の工場は風呂
は週２回だが、ここでは毎日入る事ができる。
初めて工場に入った、ここでは先輩の指図は絶対服従である、下っ端が入るまでスイーパーと呼
ばれ風呂掃除に始まり洗い物、各セクションの手伝い、失敗すれば怒号が飛ぶ。
昼飯では先輩のお茶を汲み歩き、食事の時間が３分しかない、しかも殆どが年下である、もしこ
こで短気を起こし喧嘩をすれば、特警隊が飛んでくる。
炊場担当刑務官は、二人いるがこいつ等のことは先生と呼ばなければならない。
ここでの生活は未決拘留日数を差し引いて８ヶ月である、他の連中より遥かに短い、親を殺した
奴、強姦、強盗、覚醒剤と様々な犯罪を犯した者が共同生活を送っている、中には懲役１０年と
いう殺人者もいた。

　そうこうしているうちに序列が上がってきた、工場ＮＯ、２の菜方と呼ばれるもので、包丁で野菜や魚を刻んだり処理する係りである、お陰で現在でも包丁は達者である。
炊場は３６５日稼動するが、他の洗濯工場や清掃工場などは日曜日が免業日で作業は休みである、だが炊場も一人ずつだが交代で免業になる、その日は昼飯まで布団の中で過ごす事ができるのだ、若く正常な男の身体は性欲を抑えられない、自費で購入したエロ雑誌を片手に、便所の紙を隠し、刑務官の目を盗みながら、布団を被り自慰行為に励む、後で仲の良くなった刑務官に聞くと全て解っていたらしい。
　ここに来て６ヶ月が過ぎた頃、仮釈放申請が出された、上手くいけば後一ヶ月で娑婆に出れる、その面接を受けるため理容工場で散髪をさせてもらった、懲役が決まってから坊主頭は通常だったが仮釈放が近づくにつれ髪を伸ばす行為が許されるのだ。
　今思えば様々な事があった、炊場の工場長は祐一より年下だが、工場内では絶対的な権力を持っている、或る日その権力を悪用しとんでもない行為が明らかになり、懲罰房に入れられ洗濯工場の下っ端に落ちイジメに遭っている、刑期はあと４年も残っている。
その行為とは、雑居房内で下っ端の者に自分の陰茎をシャブらせたり、猥褻な行為を虐げさせていたのだ、祐一とは舎房が違うため知らなかったが当事者が担当刑務官に事実を伝えて発覚したのだ、常軌を逸脱しているこの社会は経験した者でなければ到底理解できないだろう。

　仮釈放の日が決定した、一週間後には晴れて娑婆に出れる。
仮釈放が決まったものは鉄格子の無い部屋に移る、そして食事も麦飯から白米に変わり、作業も無くなる、しかしここを出てから何をすればいいのか考えると眠れなくなる、炊場で働いていた頃は仲間と娑婆に出たらまず煙草だな、いや女だろなどと下世話な話題であったが、いざ現実が差し迫ると思案に耽ってしまう。
１０ヵ月の間自由を奪われてきたが、あっという間の出来事であった。
　川越刑務所長の部屋にいる、仮釈放決定書の朗読が始まった、今日釈放されるのは祐一を含め３名が出所する、他二名は家族の迎えがあったが祐一は家族に不義理をしているため迎えが無い、帰る家も無いため更生保護施設(身寄りが無いものが一時的に衣食住を与えられる場所)に入る事になる、そこで就職活動をし、一ヶ月間でそこを出ることになるらしい。

　刑務所に入っていた者に就職などあるのか、そう思いながら刑務所の門を出た。
やはり外の空気は違っていた、川越駅に向かう途中煙草屋があった、セブンスターとライターを買い煙草に火を点けそっと吸い込んだ、大袈裟だがくらくらと眩暈がした。
作業報奨金(刑務作業の労働対価)なるものと所持金を合わせて５万円、早く仕事に有り付かないと大変である、祐一は２６歳になっていた。
川越から都内へ向かう電車に揺られながら、売店で買った缶ビールをチビチビ呑んだ。
　あるデータによると再犯率は高く、また刑務所に戻る奴は７割を超えるという、社会の脱落者はやはり居場所は無いのだろうか、祐一は車窓を眺めながら先の不安と戦っていた。